

多文化の学びを育む混住型国際学生宿舎の研究

主査 吉田 千春^{*1}

委員 田中 友章^{*2}, 横田 雅弘^{*3}

本研究では日本人学生と留学生が共に生活する混住寮を「学びの場」と捉え、空間と活動の観点から学習環境デザインを検討した。アジアの大学5校の先導的なレジデンシャル・カレッジ（以下、RC）と日本の先導的な7校の混住寮を対象に現地視察、ヒアリング、インタビューなどの調査を行った。その結果、空間の観点からは、居住単位のまとまりや集合形式、およびその階層性の相互関係が重要と示唆された。活動の観点からは、フォーマルとインフォーマルの活動を組み合わせ、活動への参加を促すレジデント・アシスタントが重要であることが分かった。さらに、今後はRCから得られた知見を活かし、大学教育の中に混住寮を位置づける必要がある。

キーワード：1) 混住型学生宿舎, 2) レジデンシャル・カレッジ (RC), 3) 教育寮, 4) 学習環境デザイン, 5) 空間, 6) 活動, 7) レジデント・アシスタント (RA), 8) 教室外の学び

Study of Mixed Residents-type Dormitories For Diverse Learning

Ch. Chiharu Yoshida

Mem. Tomoaki Tanaka, Masahiro Yokota

This study focuses on mixed dormitories where foreign and Japanese students co-reside. It explores learning environment design from the perspectives of Space usage and activities. Onsite observation and interviews were conducted at five major residential colleges (RC) in Asian; in Japan, seven leading universities were studied. It became clear that the territorial planning of living space and interaction between its layers of grouped living components are important. The findings also showed that the combination of formal and informal activities and the residences' participation stimulated by residential assistants are essential. The results gained from RCs are applicable to development of mixed dormitories in university education.

1. はじめに

1.1 研究の背景と本研究の位置づけ

現在、国際化や知識基盤社会の発展により、大学教育に大きな変化が見られている。授業にアクティブラーニングなどによる学生が能動的に学ぶ教育が導入され、それに伴い、教室の空間構成や使い方が変わるとともに、ラーニング・コモンズの発展など、大学教育の場が教室の外へも大きく拡張されている。その中で、現在、注目されているのが教育寮としての混住寮である。スーパーグローバル大学創成支援事業の構想調書の記載項目となり、混住寮は今後の増加が見込まれる。採択された37校の構想調書をみると、今後の教育的可能性を目指す構想は見られたものの、現状としては「混住」の定義にも相当のバラツキがあり、混住寮が大学教育の中にきちんと定位されているとは言えない。今後は大学教育・学習環境の中に「教育寮としての混住寮」を位置づけ、大学

のシステムとして整備する必要がある。

また、混住寮を対象とした研究は、建築学及び教育学の両分野において少ない。特に、建築学分野では、留学生宿舎の研究が中心で（鈴木^{文1)}、仲摩^{文2)}など）、混住寮に焦点をあてた研究はほとんどない。一方、教育学および社会学分野では、学生の立場から寮の運営及び寮生のサポートを行うレジデント・アシスタント（以下、RA）に着目した中村らの研究^{文3)}、吉田の研究^{文4)}、大学寮の短期留学生の学びに関する山川の研究^{文5)}などがある。また、混住寮の人間関係構築に着目したものは、出口・八島の研究^{文6)}、山川の研究^{文7)}などがあり、関心が高まりつつある。しかし、混住寮の学びや教育的意義に焦点を当てた研究はまだ少なく、建築学と教育学の双方を結び付けたものはほとんどない。筆者らは国内の混住寮の計画と運営に着目し、特に「居室と共用部の空間構成」と「RAなどを活用した運営上の工夫」について研究

^{*1} 明治大学大学院国際日本学研究所 博士後期課程 ^{*2} 明治大学大学理工学部 教授 ^{*3} 明治大学国際日本学部 教授

文⁸⁾を行なってきた。本研究は、これに海外の先進的な事例を合わせて、学習環境デザインという観点から発展させたものであり、建築学と教育学の両方の視点から学習環境に着目して研究を行う点に意義がある。

1.2 本研究の目的と方法

混住寮を大学教育の中に位置づけるためには、寮を「学びの場」として捉え、その学習環境をデザインすることが重要となる。美馬・山内⁹⁾は学びを構成する重要な要素として「空間」、「活動」、「共同体」の3つを挙げ、これら3つを中心として学習環境をデザインすることが重要としている。本研究では、学びのための居住環境に着目し、まず、欧米、アジア、日本における動向や展開を明らかにする。そして、今後の教育効果の高い混住寮の整備と運営に向けて、混住寮の学習環境デザインについて「空間」と「活動」の観点から有用な知見を得ることを目的とする。

この目的を達成するために、本研究では以下の方法と手順で研究を行った。第1に既往文献や既に明らかになっている知見を整理し、欧米、アジア、日本における居住環境をめぐる動向や展開を整理した。そして、近年、独自の教育プログラムを持ったレジデンシャル・カレッジ (Residential college 以下、RC) を導入し、教育寮として新しい試みを行っているアジアの大学を対象として、先導的事例の現地調査と担当者へのヒアリング調査を行った。第2に、日本の先導的な混住寮の事例を対象に、現地調査、担当者へのヒアリング調査、インタビュー調査を行い、日本の混住寮の実態について考察した。第3に上記で明らかになった成果に基づき、今後の教育寮としての混住寮のあり方を展望した。

2. 学びのための居住環境をめぐる動向

2.1 欧米、アジア、日本の大学における展開

2.1.1 欧米におけるラーニング・コミュニティの形成

社会の変化に伴い大学生に求められる能力が変化してきている。特に、グローバル化が進んだ1990年代以降、多くの先進国では、これまでの筆記試験で測定されるような知識中心の静的な「学力 (achievement)」概念とは違う、より能動的で何かを生み出す力としての「コンピテンス」(competence) や「リタラシー」^{注1)} (literacy) とよばれる「新しい能力」概念に関心が集まり、その育成に向けて模索するようになった^{文¹⁰⁾}。この方向性は、教室内の授業のあり方を変化させただけでなく、教室外での学びへの注目にもつながり、その結果、教室内外を結ぶ取組としても発展してきた。

教室内の授業の変化については、すでに2012年に異文化コミュニケーションの大家であるジョン・コンドン (John Condon) ニューメキシコ大学名誉教授が、アメリ

カの大学教員の役割は知識を伝授することから学生同士の学び合いを導くファシリテーターの役割へと完全に様変わりしたと述べている^{注2)}。近年日本でも導入され始めた反転授業 (Flipped Learning) では、学生は授業に参加する前に文献やあらかじめネット配信された教員の授業のビデオを見て、授業中にはそれについてのディスカッションが行われる。そこでは、教員はまさにディスカッションのファシリテーターである。また、教室の構造もそれに伴って変化している。従来の固定式の椅子・机を持つ教室が多様なアクティビティに適した可動式のものに置き換わるといった変化のほか、学生たちの自由な学びのための専用の施設を建設する大学もあり、これは総称ラーニング・コモンズと呼ばれている。

寮生活と大学のカリキュラムを関連づけて学びを育むコミュニティという考え方は、もとは20世紀初頭のデュイの一連の著作から生まれた。コモナリティの育成と民主主義教育の実現を目指して教育にコミュニティ概念を取り入れることとなったのである^{文¹¹⁾}。提唱されたのは、ラーニング・コミュニティという考え方で、明確な定義はないが、2つ以上の科目を学際的な観点から意図的につなげ、その科目群を履修する学生と教員の共同体を形成するもので、特に寮をベースにしたものをリビング・ラーニング・コミュニティと呼んでいる。そこでは、教室での勉強と教室外の生活とを統合して学習に文脈を提供する生活環境がデザインされている^{文¹¹⁾}。リビング・ラーニング・コミュニティは初年次教育として効果的であることが報告されているが^{文¹¹⁾}、専門領域を同じくする学生たちを同じ寮の中に住ませ、20人程度の比較的小さなグループを形成させて互いに切磋琢磨することを狙う1つの専門教育の制度としても活かされている。

これに対して、イギリスのオックスフォード大学やケンブリッジ大学の寮に伝統的にみられるレジデンシャル・カレッジは、初年次教育や専門教育というよりも、教養教育に焦点を当てたものである。ここでは、教授・チューター・学生が同じ寮で生活しながら、セミナーやさまざまなアクティビティを導入して、全人教育を行うというまさに大学の教養教育の主要な舞台を形成している^{文¹²⁾}。このようなカレッジの伝統が、先に述べた教室でのアクティブラーニングによる教授法への変化に深く影響しているのである。

2.1.2 アジア諸国における展開

アジアにおいては、2010年以降、韓国、シンガポール、香港、マカオなどのアジアのトップ大学でRCを導入するところが増加している。韓国のトップ大学では、この20年間で英語化が急速に進み、欧米の大学との人的なモビリティや制度の共通性を高める政策がとられてきた^{文¹³⁾}。

高等教育の国際化と市場化で大学間の情報交換や競争が激しくなり、上述の欧米大学の試みがアジアでも採用されるようになった。筆者らは、これらの大学の実状を把握するため訪問調査を行ったが、これについては次節にて具体的に述べる。

2.1.3 日本における展開

日本でも、文部科学省による 1984 年の留学生受入れ 10 万人計画から 2008 年の 30 万人計画、そして 2014 年のスーパーグローバル大学創成支援事業等国際化を推進する施策が次々と策定され、大学には強いプレッシャーがかけられている。しかし、日本の大学の変化はアジア諸国に比べて遅く、国際化を背景とした大学ランキング指標で決まる日本の大学のランキングも、上記諸国のトップ大学に次々と抜かれる事態となっている。この状況で、日本の大学に強く求められているものの 1 つがアクティブラーニングを視野に入れた混住寮の建設である。

アクティブラーニングについては、教室における授業形態の変化という形での浸透が望まれ、教育学からの研究の蓄積は増えているが、実際にはまだ始まったばかりである。しかし、協同的な学習や自律的な学習を支援する学習施設の機能を持つラーニング・コモンズの発想は、日本では大学図書館に組み込まれる形で現れ始めた。筆者らの所属する明治大学でも、2012 年に新設された和泉キャンパスの図書館にその機能が備わっており、全国からの視察も多い。また、お茶の水女子大学では、2011 年に開寮した学生寮「お茶大 SCC」(Students Community Commons)を、図書館のラーニング・コモンズに次ぐ第二のコモンズとして位置づけ、「共に学び共に住まう」をコンセプトに教育寮としてのコモンズを運営し始めた^{文 14)}。

一方、混住寮の歴史は、国際基督教大学(ICU)など一部の事例を除き、留学生 10 万人計画に基づいて国立大学に設置された留学生会館に始まっている^{文 15)}。これは外国人留学生のほとんどがアジアからの学生であり、当時のアジア諸国の経済力が低かったために宿舎を提供する必要があったことで設置された純粋な居住施設である。この施設は、後に外国人の出島といった批判を浴びることになり、次第にチューターとしての日本人学生だけでなく、日本人学生も共に住む混住寮という性格を強めていく。しかしながら、そもそも日本の学生寮については、学生自治が謳われて大学紛争でのアジトになった歴史もあり、教員も一緒に住んで行く教養教育や専門教育の施設であるという発想は極めて希薄であった。その後、2014 年のスーパーグローバル大学創成支援事業の構想調書では混住寮の有無や将来計画の記載が求められたため、どの程度欧米やアジアのトップ大学の寮と相応の学びの環境が盛り込まれるのか、特に新設される施設において、この理念がどのように設計や運営に反映されるのかが近

年は注目されている。従って、日本の混住寮が持つ特色や海外の大学との相違を明らかにした上で、建築と教育の両方の視点から、その目的達成に向けた知見を得ることが重要となる。

2.2 アジアの大学における RC の整備動向

2.2.1 RC の事例調査の概要

前述の通り、近年、アジアのトップ大学では、大学の教育システムとして RC を導入する潮流が生じている。日本では、RC の本格的な導入例はまだ見られていないため、海外の新しい教育寮の実態を探るために、2010 年以降に RC を導入した「延世大学(韓国)」,「シンガポール国立大学(シンガポール)」,「香港大学(香港)」,「マカオ大学(マカオ)」,及び 1980 年代から RC を導入しており、2010 年以降に新しい RC を増設した「香港中文大学(香港)」の 5 つの大学を対象として実地調査とヒアリング調査を行った。調査概要を表 2-1 に整理し、各事例の調査結果を次節にまとめた^{注 3)}。

表 2-1 RC の事例調査の概要

大学名(国名)	RC の名称	調査日
延世大学	Songdo Dormitory	2015 年 3 月
シンガポール国立大学	Tembusu College	2016 年 2 月
香港中文大学	S. H. Ho College	2016 年 3 月
香港大学	Jockey Club Student Village III	2016 年 3 月
マカオ大学	Lui Che Woo College	2017 年 2 月

2.2.2 RC の事例調査の結果

1) 延世大学(韓国)の事例

延世大学は 1957 年に設置された私立大学で、2013 年度から初年次教育として「学び」と「生活」を一体化させた環境を作るため、Songdo Dormitory を設置し、RC プログラムを開始した。1 年生は全員、延世大学インターナショナルキャンパスで学び、この寮に入ることが義務付けられている。RC の教育目標は、Convergence(融合)、Communication(コミュニケーション)、Cultural diversity(文化的多様性)、Creativity(創造性)、Christian leadership(リーダーシップ)の 5 つの C を育む幅広い教育を提供することである。

Songdo Dormitory はドミトリ 1 と 2 があり、キャンパス内に点在して設置されている。複数の階を合わせた 200~300 人からなる「ハウス」と呼ばれる単位を 1 つのまとまりとし、ドミトリ 1 に 6 つ、ドミトリ 2 に 6 つの「ハウス」を構成し、「ハウス」ごとに独自の目標やプログラムを設定している。

RC のプログラムは「全体プログラム」と「ハウスプロ

グラム」の2種類がある。「全体プログラム」は、「アカデミックイベント」、「アート&カルチャーイベント」、「スポーツイベント」の3種類からなる。また、「ハウスプログラム」は各ハウスのテーマや目標が達成できるようにデザインされており、全てのプログラムは創造性・リーダーシップ・学生の共感力を育成することを目的としている。寮には学生達の学びを支援する Residential Master と呼ばれる教授や、大学院生または大学生の Residential Assistant が共に住んでおり、ハウスの運営を行っている。

寮にはプログラムおよび様々な活動を行うことができるように、共有スペースとして、大小複数のロビー、ラウンジ、セミナールーム、コミュニティルームなどがあり、目的に合わせて集まることが可能になっている。また、自習室、マルチメディアラボ、お祈り室、卓球ルーム、ビリヤードルームなども設けられており、学生達が娯楽やスポーツを楽しむなど、必要に応じて自由に使うことができる。食事は寮内の食堂で提供され、「Korean」と「International」の2種類から選択する形式となっているが、寮内には共有キッチンもあるため自炊も可能である。居室は1部屋を2人または3人でシェアしており、各部屋には洗面所とシャワーが設置されている。

2) シンガポール国立大学の事例

シンガポール国立大学は1905年に設立された国立大学である。2011年にキャンパス内にRCなどの住居、教育施設やラーニングセンターなどの学習施設、レストランやスーパー、ボルタリングの設備やジムなどが集まったユニバーシティタウン（以下、UTown）を設立した。

このUTownには、「Cinnamon College」、「Tembusu College」、「College of Alice & Peter Tan」、「Residential College 4」という4つのカレッジが並んで設置されている。カレッジの前には24時間使用できるパソコンルームや自習室などが入った「EDUCATION RESOURCE CENTER」が配置されており、日常的に寮と学習の連携を可能にする空間が配置されている。また、寮の近くには24時間オープンのカフェも備わっており、学生達のラーニングスペースとしても活用されている。UTownの中央には緑豊かな中庭が広がり、音楽や映画のイベントなどが開かれている。

今回視察をした「Tembusu College」には約570人の学生と教職員などが居住しており、RCの高層の住居棟の低層部には2つのカレッジが共用する大規模なダイニングホールが設けられ、食堂で全員が食事を取ることが可能となっている。通常時は朝・夕食を中心に提供しているが、食器の色や配膳・下膳ルートを完全に分けてムスリムミールを提供するなど、学生の特性にも配慮されている。また、ダイニングホールの両側に各カレッジの共用空間となるラウンジが配置され、各カレッジの特徴を

現した設えがなされている。その他、ゲームルーム、音楽ルーム、体育館などの共有施設も充実している。

新入生は2年間でカレッジにおいて開講される授業を一定数履修するとともに、様々な活動に参加する。例えば、セメスターに2回程度定期開催されるフォーラムや「Master's TEA」と呼ばれる定期的集会では、カレッジのマスターが招聘する国内外からの様々な分野の専門家と少人数のグループで話す機会が作られている。

また、「Tembusu College」は5つの「ハウス」に分けられており、各「ハウス」は3～4階ごとに約100人から130人の学生で構成されている。その他、共通の趣味やスポーツなどで集まるグループもあり、RCは学生の生活と教育の基盤となっている。

3) 香港中文大学の事例

香港中文大学は1963年に設置された公立大学である。香港中文大学の最大の特徴は、1980年代からRCを導入していることである。1980年代後半に「Chung Chi College」、「New Asia College」、「United College」、「Shaw College」という4つのカレッジが設立され、2012年に教育制度が4年制大学へと改正されたことにより、新しく5つのカレッジ（「Morningside College」、「S. H. Ho College」、「C. W. Chu College」、「Wu Yee Sun College」、「Lee Woo Sing College」）が設立された。9つのカレッジは全てキャンパス内にあり、広大なキャンパスに分散して設置されている。

今回視察をした「S. H. Ho College」は、2010年から運営を開始し、現在は約600人の学生が居住している。このカレッジは大規模なダイニングホールを設けており、通常時は朝・夕食を中心に提供しているが、定期的に「High Table Dinner」^{注4)}を開催している。その他、カレッジに仲間と住み、教授や仲間達と同じ食堂で食事をし、キャンプなどの野外でのチーム活動、ワークショップやプロジェクトなどの全人教育のプログラムを通して、学生達はカレッジのメンバーになり、寮のモットーである「Culture（文化）」、「Morals（道徳）」、「Devotion（忠誠心）」、「Trustworthiness（信頼）」を身に着けることが期待されている。

4) 香港大学の事例

香港大学は1911年に設立された公立大学である。2015年にJOCKY CLUB STUDENT VILLAGE IIIが建設され、「Shun Hing College」、「Chi Sun College」、「Lap-Chee College」、「New College」の4つのカレッジが設置された。この4つのカレッジには合計約1800人の学生が居住している。RCが文化的に多様化したラーニング・コミュニティになるように、学部生、大学院生、多様な国からの留学生、中国からの学生、現地の学生などが混ざるようにバランスをとっている。また、各カレッジには独自のミッションやモットーがある。

居室タイプは個室のシングルと2人でシェアをするダブルの2種類がある。各フロアには共有のキッチン、テレビ、トイレとシャワー室が設置されている。

カレッジの高層住居棟は基壇部で接続される構成になっており、基壇部の屋上は隣接する緑地に面した屋外通路で連結され、これに面して各カレッジのエントランスロビーおよび共用空間が設置されている。ロビーおよび共用空間は外から見えるようになっており、各カレッジの特徴を現した設えがなされている。基壇部下部には大規模な多目的ホールが設置され、セメスターに2～3回程度「High Table Dinner」^{注4)}が開催されている。

5) マカオ大学の事例

マカオ大学は1981年に設置された公立大学で、2014年の大学移転に伴いRCを本格的に導入した。学部教育を改革するために、教育において「4-in-1モデル」を取り入れ、実施している。これは専門教育、一般教養、研究とインターンシップ教育（Research & Internship Education）、コミュニティとピア教育（Community & Peer Education）の4つを重視した教育であり、RCのシステムは、4番目のコミュニティとピア教育を実施するための重要な柱と位置づけられている。RCは、異なる学年、年齢、専門、文化を持った学生達が共同生活を行うようにデザインされており、多様な学生から学び、教室の外の経験からの学びを通して専門を超えた「ソフトスキル」を獲得できるようになっている。現在、キャンパス内に10のRCがあり、どのような活動を行うかは各カレッジに任されている。

今回視察をした「Lui Che Woo College」は2014年度から運営を開始し、約450名の学生が居住している。1年生は原則としてRCに住み、「High Table Dinner」^{注4)}への参加が義務付けられている。また、RCには3つのタイプの活動がある。1つはCollege Master（教授）などが企画するゲストスピーカーの講演や海外での活動である。2つ目は、学生組織が企画するRC対抗のスポーツイベントや映画上映会などである。3つ目は学部生と大学院生の「レジデント・チューター／レジデント・アシスタント」が企画する寮生の交流を促進する活動である。このように、異なったレベルで活動をデザインすることで、専門以外の能力の育成を目指している。

建物は中庭を囲むように建てられており、1階に事務室、カウンセリング室などがあり、共有スペースは、学生食堂、音楽室、ダンス室、フィットネスルーム、図書室、テレビ室、ランドリーなどがある。居室フロアには小さなキッチン、学習室、コミュニティスペースなどが設けられている。居室は2人部屋が基本であるが、ドアを介して洗面台、シャワー、トイレが設置されており、これらは4人で共有する形になっている。

2.3 アジアの大学のRCにおける潮流

前述の通り、5つの大学のRCの整備実態が明らかになったが、これらから以下の点を考察することができる。

まず、RCの敷地計画上的特徴についてである。その機能構成や施設配置については、独立点在型と複数棟連担型の2つのタイプに大別される。独立点在型は、RCがキャンパス内に1棟ずつ独立して設置されており、食堂、音楽室、図書室、スポーツ施設などの様々な機能を各々のRCに配して構成される事例である。他方の複数棟連担型では、複数のRCが1つのエリアに連担して配置され、住戸を中心とした居住棟は独立的に配置されるものの、大規模な食堂や体育館等の共用機能を担う施設を共有する形で連担して配置される事例である。これは共用部の配置を階層的に工夫することで、面積やコストを押さえながら、良好なコミュニティを形成するための工夫としても理解できる。また、シンガポール国立大学のように、複数のRCが、全体で共用するラーニングセンターを取り囲むように配置され、より広域のキャンパス環境を形成している例も見られ、キャンパス計画における新しい試みとしても興味深い事例である。

次に、各大学の運営上の特徴について述べる。大学によって異なるが、基本的には経験や実績のある教授達がRCを管理・運営するマスターとして配置されていた。その配下に、RCの教育プログラムを担当する教職員や大学院生、学生サポーターがRCの様々なプログラムを考え、運営と活動を行っていた。寮の運営に教員が中心的な立場で関わることは教育の質の観点からも重要な点である。さらにRCを運営する教職員やRAと学生達が居住を共にし、食事を含む生活を一緒にしながら様々な活動を行うことで、RCの中でコミュニティが醸成される工夫がなされている。このようにアジアの主要大学で、寮生活と学びを結びつける新しい潮流が確かなものとなっていることが明らかになった。

3. 日本の先導的な混住寮の実態

3.1 国内の事例調査の概要

本章では、日本の混住寮の先導的事例について調査・考察する。まず、37校のスーパーグローバル大学創成支援事業の構想調査を分析し、2000年以降に設立され、RAなどを配置し、留学生との交流やグローバル人材の育成を目的の1つとして運営を行っている先導的な事例として7校抽出し、当該7校の11の混住寮について実地調査とヒアリング調査を行った。表3-1^{注5)}にその概要を示したとおり、調査は2013年から2015年にかけて行われ、九州大学を除く6つの大学に関しては、担当者へのヒアリング（30～60分）を見学の前後に行った。次に、その中でも運営面において先導的な事例として立命館アジア太平洋大学の「APハウス」を取り上げ、寮生へのインタ

ビュー調査を行った。

3.2 「空間」の観点からの分析

まず、「空間」の観点から分析を行うために、先導的事例として抽出した7校の大学における11の混住寮の調査結果について概要を表3-1に整理した。そして複数の寮を視察した大学では設置年が新しい事例を取り上げて、寝室を中心とした関連機能の集合の形式と階層性に着目し、平面図に基づいて図化し、考察を行った。

1) 九州大学の事例（ドミトリ－3）

九州大学伊都キャンパスから徒歩5分程度の所に隣接された5階建の寮である。4つの寝室とキッチン・ダイニング・リビングおよびトイレ・洗面・浴室という共用部により1つのユニットをつくり、中庭を囲んだ形で各階は基本的に8ユニット（32人）で構成されている。また、リビングが隣接する2つのユニットが共有して使用するバルコニーがあり、そこにはテーブルと椅子が設置されて、8人単位での交流を促す仕組みになっている。1階には寮全体で共用する多目的室が、外部にバーベキューが可能な設備が備えられている。このようにLDKと水回りを含む4室ユニットと寮全体共用部という2層の階層性で構成されている。

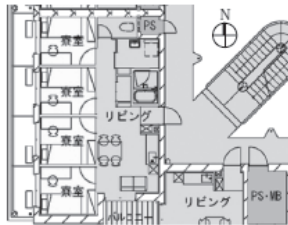
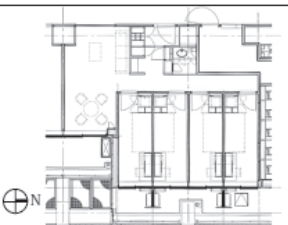
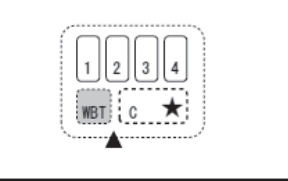
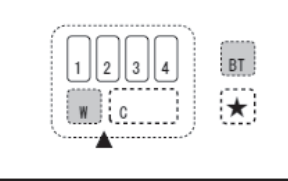
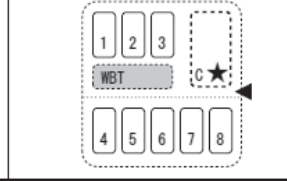
2) 早稲田大学の事例（国際学生寮WISH）

中野四季の都市（まち）地区に建設された寮であり、1階に生涯学習施設を設け、2階から11階が学生寮になっている。4つの寝室とキッチン・ダイニング・リビングおよび洗面という共用部により1つの基本ユニットをつくり、各階に中廊下型でユニットが配置されている、EVコアの両側の各ウィングに12ユニット（約50人）、各階24ユニット（RA専用1人室を除く）合計約100人で構成されている。各ウィングにはシャワー・脱衣室やWC・ランドリールームを設け、各階の中央部に交流ラウンジや交流スペースを設けている。また2階には、多目的教室、音楽室、フィットネスルームなどの共用部を設けている。このようにLDKと洗面を含む4室ユニット、水回りや交流機能を設けたウィング／階の共用部、寮全体共用部という3層の階層性で構成されている。

3) 金沢大学の事例（先魁）

「先魁」は金沢キャンパスから移転した角間キャンパス内に設置されている。分棟型の6棟の居住棟と1棟の共用棟で構成され、1棟が男女共用、2棟が男子宿舎、3棟が女子宿舎である。8つの寝室とキッチン・ダイニング・リビングトイレ・洗面・浴室という共用部により2階建ユニットをつくり、2～3のユニットを長屋形式で連結して住居棟を構成している。別棟で多目的室など

表 3-1 事例調査の結果一覧（1～3）

大学名	1. 九州大学	2. 早稲田大学	3. 金沢大学
寮の名称 (下線は住戸の分析事例)	① ドミトリ－3 ② 伊都協泰館	国際学生寮 WISH	先魁
訪問日／ヒアリングの有無（時間）	2014年9月／無	2015年9月／有（約30分）	2015年2月／有（約60分）
設置年	① 2014年、② 2014年	2014年	2012年
事業主体	大学直営	大学直営	民間活用／BTO方式サービス購入型
所在地	福岡県福岡市	東京都中野区	石川県金沢市
場所	① キャンパス隣接、② キャンパス隣接	キャンパス外	キャンパス内
構造	①鉄筋コンクリート造 5階建 ②鉄筋コンクリート造 9階建	鉄筋コンクリート造 11階建 一部 鉄骨造・免震構造	軽量鉄骨造 2階建（住居棟） 鉄骨造 1階建（共用棟）
住戸タイプ	① ユニット（4人） ② 個室／ルームシェア（2人）／家族室	ユニット（4人）	ユニット（8人）
部屋面積	① 個室 7㎡＋共用LDK 28㎡ ② 個室 17㎡、シェア（2人） 41㎡	個室 8.6㎡＋共用ラウンジ等 32㎡	個室 8.5㎡＋共用LDK 15㎡
最大収容人数	① 136人、② 601人	872人（257室）	104人（13ユニット）
平面プラン (事例7は、シェア棟を図化・分析した)			
集合の形式 凡例 □: 寝室ユニット ■: 水回り T: トイレ W: 洗面 B: 浴室 C: 共用部 ★: 共用キッチン ▲: エントランス			
集合形式の階層性	ユニット／寮全体（2層）	ユニット／ウィング・階／寮全体（3層）	ユニット／寮全体（2層）

の共用部からなる交流ホール棟が設けられている。このように LDK と水回りを含む 8 室ユニットと寮全体共用部という 2 層の階層性で構成されている。

4) 国際教養大学の事例（さくらヴィレッジ）

国際教養大学ではキャンパス内に複数の学生宿舎を設けており、約 90% の学生が学内に居住しているが、本事例は 2013 年に運用が開始された木造 2 階建ての学生宿舎である。3 つの寝室とキッチン・ダイニング・リビングおよびトイレ・洗面・浴室という共用部によりユニットをつくり、ユニットを 2 階建てで積層させ、長屋形式で連結して住居棟を構成している。別棟でランドリーが設けられている。このように LDK と水回りを含む 3 室ユニットと寮全体共用部という 2 層の階層性で構成されているが、キャンパス内に設置されていることもあり、外部に開放されていて、寮の領域性は強くない。

5) 国際基督教大学の事例（樺寮）

国際基督教大学大学ではキャンパス内に教育寮として位置づけられた複数の学生宿舎を設ける。樺寮は RC 造 3 階建て 1 階には男子、2・3 階には女子が居住している。2 人がルームシェアする寝室ユニット 7 つが「ポッド」と呼ばれるスペースを取り囲んでまとまりのある 14 人の居住領域をつくり、隣接するトイレ・洗面・浴室を共用している。各階には 3 つのポッドがシェアするキッ

ンと洗濯室、物干し場などの共用部が設けられるとともに、1 階にはラウンジとソーシャルルームなどの共用部が設けられている。このように 2 人シェアユニット、水回りを含む 14 人のポッド、階の共用部、寮全体共用部という 4 層の階層性で構成されている。

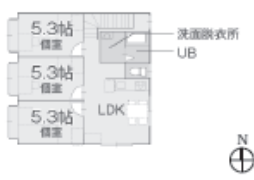
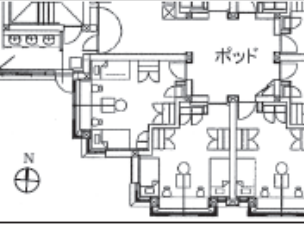
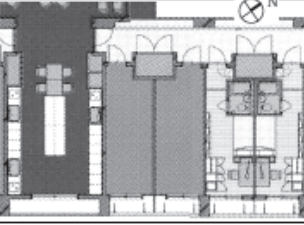
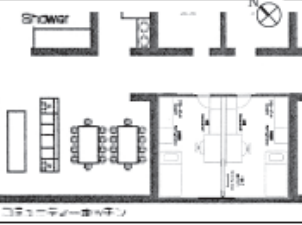
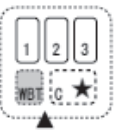
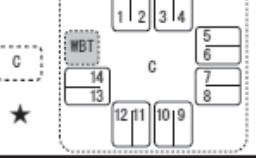
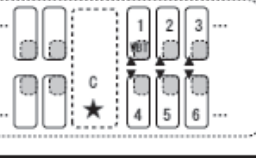
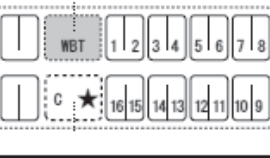
6) 芝浦工業大学の事例（国際学生寮）

芝浦工業大学大宮キャンパスに 2013 年 3 月に新設された国際学生寮は、寝室にトイレ・洗面・浴室となるユニットバスを設けたワンルームタイプであり、各階に 32 室が共用する交流スペースと共用キッチン・ダイニングを設けている。加えて、1 階部分には、学生グループが利用可能なミーティングルームや講演会など多目的室を設けている。このようにワンルーム個室、共用キッチンを含む階の共用部、寮全体共用部という 3 層の階層性で構成されている。

7) 立命館アジア太平洋大学の事例（AP ハウスシェア棟）

立命館アジア太平洋大学は大学設置の寮として、キャンパスに隣接する形で「AP ハウスⅠ」と「AP ハウスⅡ」があり、学外に「AP ハウスⅢ」がある。AP ハウスⅡシェア棟では、引戸で 2 室連結可能な寝室ユニット 19 室が中廊下型で配置されて、中央部に設けられた共用キッチン・ダイニングおよびトイレ・洗面・浴室という共用部によりウィングが構成され、各階に 2 つのウィングが EV

表 3-1 事例調査の結果一覧（4～7）

4. 国際教養大学	5. 国際基督教大学	6. 芝浦工業大学	7. 立命館アジア太平洋大学
① こまち寮 ② さくらヴィレッジ	① グローバルハウス ② 樺寮	国際学生寮	① APハウスⅠ ② APハウスⅡ（シェア棟を含む）
2015年2月／有（約60分）	2015年7月／有（約60分）	2013年9月／有（約30分）	2014年9月／有（約60分）
① 2004年、② 2013年	① 2001年、② 2010年	2013年	① 1999年、② 2000年
大学直営	大学直営	大学直営	大学直営
秋田県秋田市	東京都三鷹市	埼玉県さいたま市	大分県別府市
キャンパス内	キャンパス内	キャンパス隣接	キャンパス隣接
① 鉄筋コンクリート造4階建 ② 木造 2階建	① 鉄筋コンクリート造 4階建 ② 鉄筋コンクリート造 3階建	鉄筋コンクリート造 5階建	鉄筋コンクリート造 5階建
① ルームシェア（2人） ② ユニット（3人）	① ユニット（4人） ② ルームシェア（2人）	個室（1階に研究者用家族ユニット）	① 個室 ② 個室／ルームシェア（2人）
① 個室 14㎡＋共用水回り ② 個室 8.8㎡＋共用LDK 29.1㎡	① 個室 12㎡＋共用 ② 個室 25㎡	個室 17㎡	個室タイプ 13㎡ ルームシェアタイプ 26㎡
① 184人、② 107人	① 68人、② 126人	120人	① 425人、② 個室477人＋シェア378人
			
			
ユニット／寮全体（2層）	ユニット／ポッド／階／寮全体（4層）	個室／階／寮全体（3層）	ユニット／ウィング／階／寮全体（3層）

コアの両側に配置された構成となっている。1階部分はビリヤードや卓球台などを設置した娯楽施設と畳スペースなどを設けたコミュニケーションスペースなどの共用部を設けている。このように連結可能な寝室ユニット、水回りや共用キッチンなどを設けたウィング／階の共用部、寮全体共用部という3層の階層性で構成されている。

上記の7事例について寝室および寝室の属する基本単位であるユニットを中心として、関連する共用機能の集合の形式を図化されたダイアグラムにより分析してみると、寝室および水回りを中心として基本的なまとまりが構成されているのが分かる。そして、そのまとまりの中に一定の交流を担う共用部を持つ事例が多いこと、共用キッチンを含む交流機能をその基礎階層に持つものと次の上位階層に持つものの2タイプが大半であった。

階層性については、基礎階層の寝室の集合が8室程度までの事例は2層の階層性が大半だが、その集合が10室以上の事例は、3層以上の階層性とすることで、基礎階層のコミュニティの大きさを、それを担う空間の複層性で制御している傾向が示唆された。本研究では、調査対象とした事例数も限定的で、単純な訪問調査により外形的な特徴の観察・考察を行なうレベルに留まっているため、建築計画の観点から適切な集合形式や階層性のあり方、あるいはその相互関係を明らかにするには至っていない。しかし、後述の活動の運営の観点からも、その集合形式や階層性によって生まれる空間上のまとまりとコミュニティのまとまりが相互に協応するように計画・運営を行っていくことが重要と考えられる。

3.3 「活動」の観点からの分析

次に、混住寮においてどのような活動が行われているかについて考察する。今回調査対象とした先導的な7事例は異なる言語・文化背景を持つ学生達の共同生活における交流を主眼としている。そのため、RAや学生のリーダーを配置し、学生が主体的に寮を運営するシステムが導入されていた。一方、教育プログラムへの参加が義務づけられている事例は早稲田大学「WISH」の「Social Intelligence(SI)プログラム」のみであった。

そこで、寮の活動をより詳細に把握するため、日本の混住寮の中で規模が大きく、多文化環境が整い、RAを活用し、学生が主体的に寮の管理・運営行っている先導的な事例として立命館アジア太平洋大学の「APハウス」を抽出し、RAへのインタビュー調査の結果を分析した。

3.3.1 インタビュー調査の概要

インタビュー調査の対象者は1年以上RAを経験した寮生10名である。RA経験者をインタビュー対象者とした理由は、「寮生活を通して大きく成長する学生が多いこと」、「寮生としての経験に加え、寮の運営を行うRAとし

ての経験の両方を持つこと」の2点である。APハウスのRAは、半年ごとに募集を行い、書類と面接での選考が行われ、奨学金として1か月に2万円が支給される。

インタビュー調査は2014年から2017年に行われた。対象者の選出は、APハウスの専任職員に研究の主旨を説明し、紹介および公募を行い、希望者にインタビューを実施した。インタビューには2つの手法を用い、次のように実施した。まず、「入寮から退寮までのライフライン」を描いてもらい、その図を見ながらライフラインインタビュー^{文16)}を行った。次に、半構造化インタビューを行った。インタビューは1人約90分から150分で、インタビューは許可を得て録音し、録音データは全て文字化し、分析データとした。分析は「活動」に関する部分を抽出し、KJ法の手法を援用し、カテゴリー化を行った。インタビュー対象者の概要は表3-2の通りである。

表3-2 インタビュー対象者の概要

	性	出身	RA 経験	入寮時の言語レベル ※スピーキング（自己申請）
A	男	東南アジア①	1年	日本語：上級／英語上級
B	女	東南アジア②	1年半	日本語：中級／英語上級
C	男	南アジア	1年半	日本語：無／英語：上級
D	男	西アジア	2年	日本語：無／英語：上級
E	男	東アジア	2年	日本語初級／英語：初級
F	女	日本	1年	英語：中級
G	女	日本	2年	英語：上級
H	女	日本	1年半	英語：初級
I	女	日本	1年半	英語：初級
J	男	日本	1年半	英語：上級

3.3.2 APハウスの「活動」について

APハウスの活動を大別すると、寮のシステムとして毎年行われているフォーマルな活動と、寮生活を通して自然発生的に行われているインフォーマルな活動の2種類が見られた。この2種類の活動について表3-3にまとめ、考察を行った。なお、APハウスの運営はRAが中心となっていて行っているが、ハウス内にオフィスが設置されており、6人の職員が常駐し、RAのサポートやピースツアーなどの教育プログラムを行っている。

1) フォーマルな活動

APハウスでは、フロア^{注6)}が1つのまとまりの単位となっており、1フロアは居室数に合わせて20～50人のコミュニティで形成されている。また、APハウスには食堂がないため、自炊をするキッチンとダイニングスペースが学生達の主な共有スペースとなっていた。個室のフロアには中央寄りに1つ、シェア棟のフロアには2つのキッチンが設けられている。フォーマルな活動は、空間上の特徴に合わせて、「フロア」を中心に「棟」、「寮全体」

とネットワークが拡大されるようにデザインされていた。これは、RAの組織体制とも関わっており、RA組織では、各フロアに言語やRA経験数が異なる2名のRAが配置され、棟ごとに1名の棟リーダーを置き、寮全体として性別や言語・文化背景が異なる3名からなるRAリーダーズを置く体制となっている。

<フォーマルなフロアの活動>

フォーマルな活動の核となるのはフロアにおける活動である。フロアの活動には「ルールの共有」と、「交流促進」を目的とした2種類の活動が見られた。まず、「ルールの共有」を目的とした活動には、月に1回行われる「フロア会議」への出席と「キッチンの清掃」があり、寮生に義務付けられている。「フロア会議」は、各フロアのRAが開催し、連絡事項やフロアの問題を共有し、話し合う場となっており、RA達は毎月フロア会議で寮生が飽きないように、常に問題となるゴミの分別をクイズ形式で注意を促したり、学生が話しやすい雰囲気を作るためにまず寮生の意見を聞くなど、様々な工夫を行っていた。また、「キッチンの清掃」は毎晩当番制で行われており、担当人数や清掃の仕方は各フロアに任されていた。キッチンの清掃は、あまり利用しない学生などから不満が出ることもあるとのことだが、次の2つの機能があると考えられる。まず、留学生に、ゴミの分別を理解させ、日本で生活をする基盤を整えさせることである。次に、寮生に一定の役割を与え、ルールを共有することにより、フロアへの参加を促すきっかけを与えることである。次に、「交流促進」を目的とした活動には、主に半期に2回行われるフロアイベントがあり、これは、任意の参加であるが、キッチンを使った「食事パーティー」、「フロア

のみんなで外出」など、各担当RAにより様々な企画が行われていた。また、1年に1回、寮全体の大イベントとして行われる寮祭（世界祭）では、フロア単位で企画が行われ、これに参加することでフロアの結束力が一気に高まるとのことである。フロア単位で企画を行うことで、多様な背景を持つ寮生達が同じ目標に向かい、協働で活動を行う機会が作られ、帰属意識が高まると考えられる。さらに、寮祭では、RAのサポートのもと、寮生がフロアのリーダーを務め、主体的に活動することが求められており、寮生の成長を促す機会が与えられていた。

このように、フロアにおけるフォーマルな活動は、RAが主体となり、学生達の生活の基盤を整え、フロアへの参加意識を高めることで、フロアが寮生の居場所となるように活動がデザインされていた。

<フォーマルな棟・寮全体の活動>

「棟」レベルでは、フロアのネットワークをさらに広げることを目的に、学期に1～2回、RAが主体となり、交流促進のイベントが実施されていた。これらのイベントは、寮内の共有スペースやバスケットコートなどが使用されていた。また、「寮全体」としては、「入寮式」や「年末のイベント」、「寮祭」など、目的ごとに大規模なイベントが行われており、大学に隣接する立地を活かし、大学のホールや食堂なども使用して行われていた。

新入生が寮の活動に参加する基本的なプロセスとしては、まず、キッチンなどで出会った人に自己紹介をするなど、最初はフロアの学生と顔見知りになる。次に、入寮開始時期は新入生の歓迎会や様々なイベントが続くため、イベントに参加することで、他のフロアや棟の寮生達とも顔見知りになるとのことである。寮でのフォー

表 3-3 フォーマルな活動とインフォーマルな活動

空間領域	目的	フォーマルな活動 (内容)	空間領域	インフォーマルな活動 (内容)
居室 (ユニット)	なし	なし	居室 (ユニット)	少人数で関係を深める活動 雑談 飲み会 集まり 相談 など
(ウイング) フロア	ルールの共有	キッチンの掃除	(ウイング) フロア	
	ルールの共有	フロア会議		
	交流促進	フロアイベント		
棟	交流促進	棟イベント	棟	自分が所属するフロアの 仲間との関係を構築し、 人間関係を深める活動 共に生活 する 共に語る 共に遊ぶ 共に学ぶ など
寮全体	危機管理	避難訓令	寮全体	興味・関心・気の合う仲間 との関係を構築し、ネット ワークを広げる活動 喫煙所 仲間 お風呂 仲間 ビリヤード スポーツ ゲーム 勉強 など
	学習 交流促進 成長促進	スタディーツアー など		
	交流促進 成長促進	イベント ・新入生歓迎会 ・年末のイベント ・寮祭 など		

マルなイベントは寮生達にとって出会いのきっかけを与えるものであり、一度イベントなどで顔見知りになると、挨拶をする関係になり、その後は食事をする、遊ぶなどが容易にできるようになり、ネットワークを広げたり、関係を深めたりすることにつながっていた。

さらに、教育を目的とした活動としては、APハウスのオフィスが企画するピースツアーなどが挙げられる。年に2回、希望者を対象とし、平和をテーマにした広島や長崎へのスタディーツアーが行われている。これは、APハウスのオフィスが主体となって実施し、この数日間のスタディーツアーでは、様々な場所に実際に行き、募金活動や被爆者の話を聞くなどの体験を行う。また、スタディーツアーのリーダーを寮生から募集し、グループのリーダーとするなど、寮生がリーダーを経験する機会が与えられていた。さらに、このスタディーツアーをきっかけに、人間関係を築くきっかけになったという例や、寮生活の転機としてスタディーツアーの経験が語られたケースもあり、交流を促進する役割も担っていた。

以上のように、フォーマルな活動は、主に寮生達にとって人間関係を構築し、広げるきっかけを作ることにつながっていた。また、自分の能力を発揮し、主体的に活動を行う機会を提供するものとなっていた。

2) インフォーマルな活動

24時間共に過ごす寮生活においては、日常生活においても様々な活動が行われていた。次に、「フロア」、「居室」、「棟・寮全体」の空間を使用して、どのようなインフォーマルな活動が行われていたかを詳述する。

<インフォーマルなキッチンの活動>

インフォーマルな活動においても、フォーマルな活動同様に、フロアを中心とし、主にキッチンを中心に交流や活動が行われていた。キッチンでは食事を一緒に作って食べる、キッチンに設置されているテレビで映画を見たりゲームをしたりする、言語の学習会を行う、友達と宿題をする、明け方までみんなで語り合うなど様々な活動が行われており、正にコモンズの役割を果たしていた。

RAはフロアマネジメントの中でも特にキッチンにおける交流を重視しており、多くのRAはキッチンで勉強などを行い、できるだけキッチンにるように心がけていたとのことである。また、居室に学生がこもらないように、1人1人の部屋をノックし、キッチンに出てくるように声をかけるなど、フロアのコミュニティへの参加を促す工夫が行われていた。さらに、フロアのコミュニティの意識を高めるため、お揃いのTシャツを作ったり、夜キッチンにいる人と「星を見に行こう」などと寮生活の思い出になるような活動を行っていた。日本人学生と留学生が混ざり、家族のようなコミュニティを作るには、大規模なイベントだけではなく、このような日常生活に根ざした小さい仕掛けや工夫こそが重要と言える。

また、APハウスのキッチンとダイニングはどのフロアにおいても壁やドアがないオープンなスペースになっている。さらに、APハウスⅡの個室のフロアではエレベーターの正面にキッチンが設置され、居室に行くには必ずキッチンを通る空間構成になっている。キッチンとダイニングが寮生達に開かれ、自然に出会いや交流を促す空間がデザインされている場合はRA達もコミュニティ形成がしやすいとのことである。寮生が集まり、多様な活動が生まれるには、それを促す空間構成も重要である。

<インフォーマルな居室の活動>

インフォーマルな活動においては、居室も重要な交流の場となっていた。APハウスでは、居室の中でのみ飲酒が許可されており、居室では仲の良い友達との集まりや、飲み会が行われていた。狭い居室に10人以上集まることもあるとのことだが、より少人数で親密な関係を構築する場が築かれていた。特に、居室の集まりでは、文化的な違いなどについても率直に質問し、気軽に語り合うことができるとのことであった。また、RAの中には、寮生がいつでも相談できるように居室のドアを開けておく、「何かあったらいつでもノックしてください」という貼り紙をし、寮生が気軽に居室に足を運び、相談できるようにする工夫も見られた。

居室では、少人数で時間を気にせずに語り合うことができ、密な人間関係が構築され、その中で様々な文化や考え方の交換、相談などが行われていた。

<インフォーマルな棟・寮全体の活動>

フォーマルな活動における「棟・寮全体の活動」は主にネットワークを広げる活動が中心に行われていた。一方、インフォーマルな活動における棟・寮全体の活動は、気の合う仲間、共通の趣味や関心を持つ仲間が集い、交流や活動行われていた。具体的には、1階の共有スペースに置かれているビリヤードや卓球台を利用して遊ぶ、共有スペースのソファや机で勉強する、相談する、語り合う、喫煙所で煙草仲間と話す、お風呂に入りながら日本語を教えてもらう、バスケットボールやスポーツをするなど、フロアや棟を超えた交流が生み出されていた。

3.3.2 キーパーソンとしてのRAの役割と学び

このように多文化環境の混住寮では、多様な学生との人間関係を構築することで、共同生活を通してより多くの学びが生起すると考えられる。今回インタビューしたRAの多くがフロアマネジメントの課題として留学生と日本人学生の交流を挙げていた。特に、日本語も英語も十分にできない学生は同じ国の学生と固まる傾向にあり、他国の学生との関係が築けずに寮を去るケースも見られるという。フロアでは、フォーマルな活動もインフォーマルな活動も、RAの力量が大きく影響し、様々な環境要因はあるものの、RAがフロアマネジメントを高いレベル

で行っている場合は良い人間関係やコミュニティが構築できる可能性が高いと言える。良好なコミュニティを作るために、RAの細かいサポートが不可欠である。

また、今回インタビューしたRAはフロアマネジメントおよびイベントなどの企画を高い意識を持って行い、活動に主体的に関わることにより、大きく成長するプロセスが見られていた。APハウスのRA組織は60人以上のメンバーで構成されており、異なる言語・文化背景を持つ寮生のために活動を行っている。イベントの企画・運営では数十人のフロアイベントから、100人規模の棟のイベント、1000人規模の寮全体のイベントの企画・運営をすることもある。また、様々な相談への対応、問題解決などの多くの活動を、異なる言語・文化背景を持った学生達と協働で行うように設定されている。そのため、RA達は、最初は様々な失敗や葛藤を経験するが、それらを仲間のサポートや励まし、省察などを通して乗り越え、多文化環境で必要な語学力、柔軟性やリーダーシップなどを育みながら、寮生のロールモデルとなり、多文化環境の寮のRAとして力量が発揮できるように成長していた。

さらに、今回インタビューをした全員が、寮生活での変化について、毎日、色々な国の寮生と話すことで、友達の国の文化や情報に敏感になったことを挙げていた。また、多くが友達の国だけではなく、知り合いがいない国についても気になるようになったと話しており、多文化環境の中で、異なる国の寮生とのコミュニケーションが蓄積することで、文化への気づきや情報の受け取り方に変化が見られることが分かる。

3.3.3「活動」についてのまとめ

混住寮では、寮生活を通して多様な学生と出会い、深く広く人間関係を構築し、豊かな学びを創出することが不可欠である。そのためには、フォーマルな活動とインフォーマルな活動を相互に組み合わせ、寮生達が主体的に行うインフォーマルな活動の質と量が高まるように活動をデザインすることが重要となる。今回のAPハウスの事例では、フォーマルな活動は、生活の基盤となる「フロア」を中心に、「棟」、「寮全体」と空間領域のまとまりの単位とともに、人間関係が拡大するようにデザインされていた。一方、インフォーマルな活動は空間領域の区切りが緩やかで、領域を超えて様々な活動が行われていた。また、居室では仲間との集まりや飲み会などの「少人数で関係を深める活動」が中心に行われ、フロアでは、「共に生活する仲間との関係を構築し深める活動」が行われていた。これらは目的を持った活動というよりは、一緒に何かをすることが重要であり、家族のような関係を構築することにつながると言える。さらに、「棟・寮全体」では共有スペースに設置されたビリヤードや喫煙所

などの設備を利用し、「興味・関心・気の合う仲間との関係を構築し、ネットワークを広げる活動」が行われており、インフォーマルな活動を通して、「生活のためのコミュニティ」と「興味関心によるコミュニティ」の大きく2つが形成されていることが分かった。

このように、フォーマルな活動とインフォーマルな活動を様々なレベルで行うことにより、より深く、より広いネットワークが生まれ、多様な学びが生まれると考えられる。学生達が寮で多くの活動を行い、学びを育むためには、寮生が活動に参加しやすい空間作りと、活動に参加させる仕組みをいかに作るかが重要である。APハウスでは、寮生を活動に参加させる仕組みづくりは、RAにより行われていた。今回インタビューを行ったAPハウスのRA達は、高い意識を持ち、主体的に責任を持って寮の活動に関わることで、寮生からもロールモデルや「憧れ」の存在として尊敬されており、それが寮生および寮全体の学びに影響を与えていると言える。

今後は活動に関する事例数を増やし、寮生への教育プログラムやRAの研修などを検討し、いかに参加の仕組みを作るか、いかに深い学びが生まれる活動をデザインするかに加え、誰が管理、運営するかを含めて寮の学習環境をデザインし、教育寮としての質を高めることが重要であると言える。

3.4 混住寮の学習環境のまとめ

以上のように、混住寮は異なる背景を持つ学生との共同生活を通じた学びに焦点がおかれている。そのため、いかに寮生達がより深く広く人間関係を構築できるかが重要とされ、ユニットなどのより小さい単位をまとまりとする方向性で建築計画が行われていると言える。また、活動の観点からも、より良いコミュニティおよびより広いネットワークが築けるように、交流を促進する活動が中心に行われており、その仕組みをRAという学生に任せることで、学生主体の寮の運営が行われている。

本研究では空間と活動の事例数が非対称であったため、空間と活動の相互の関係を明らかにするには至らなかったが、今後は「居住寮」から「教育寮」への方向性の中で、空間と活動の関係をどのように考えて、整備／提供を行うのか、活動を通して生み出される学びはどのようなものを想定するのか、そして中間媒介者としての「RAの役割や機能」および「RAの学びや成長」をどう考えるかについて、研究を進める必要がある。

4. 今後の混住寮の整備と運営に向けて

以上のように、アジアのRCと日本の混住寮について考察した。この2つはその発展の経緯や設置の目的が異なるため、単純に比較することは難しい。しかし、大学教育の中に教育寮をきちんと位置づけ、運営されているRC

から得られる示唆は多い。具体的には、次の3点があげられる。第1に、大学教育の戦略・政策の中で、寮を正式に教育の場と位置づけ、運営が行われている点である。第2に、多種の学びの空間／活動が提供されており、学生達が生活および学びのスタイルとして様々な場や活動を選択できる点である。第3に、教職員がトップとなり、RCに居住するなどして専門性を生かして寮を運営している点である。

国内の混住寮においては学生がトップになり、主体的に寮を運営しているという特徴があり、グローバル人材の育成などの点では成功している例もある。しかし、今後は学生と教職員が協働し、寮の運営を行うことで、RAの能力によらず、安定したシステムを構築することも可能になると考えられる。また、必ずしも全ての寮を教育寮として位置づける必要はなく、居住のための寮、コミュニケーション重視の寮、教養教育のための寮など、学生達が目的に合った寮を選択できることも重要である。しかし、教育寮として位置づける場合には、長い伝統に培ったリビング・ラーニング・コミュニティの概念や、RCとして昇華している近年のアジアの大学など、より広いグローバルな視野から整備・運営を検討し、その特色を活かした発展を目指すことが望まれる。

※本研究は2014年度明治大学新領域創成型研究「グローバル化時代の国際学生宿舎の計画および運営に関する研究」による助成、および2014年度明治大学大学院生研究調査プログラム助成「留学生と日本人学生の生活場面における学び—寮生活を中心に—」、2016年度明治大学大学院海外研究プログラム「多文化生活環境における学び—混住寮をフィールドとして—」の助成を受けて行なわれた。

<注>

- 1) 原文通り
- 2) 第33回異文化間教育学会大会の基調講演
- 3) 実地調査および担当者へのヒアリングと合わせて以下の資料を参照した。
 - ・2015 Residential College Guidebook English Ver. YONSEI UNIVERSITY INTERNATIONAL CAMPUS
 - ・シンガポール国立大学：<https://tembusu.nus.edu.sg/>
 - ・香港大学：http://www.jockeyv3.hku.hk/?page_id=184
 - ・香港中文大学：
<http://www.cuhk.edu.hk/english/college/shho-college.html>
 - ・マカオ大学：<https://rc.umac.mo/>
- 4) カレッジ(寮)に住む全員が正装して参加するフォーマルなディナー。講話者が招かれることもあり、この機会が人脈づくりや寮への帰属意識を高めることにも寄与している。
- 5) 表3の作成に当たって以下の文献・資料等を合わせて参照した。平面プランは以下に掲載されている図版を引用・加工して、同スケールとなるよう作成したが、作図上の制約による誤差を含むものである。
 - ・九州大学：<http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/supportcenter/housing/dormitory3>
 - ・早稲田大学：中野国際コミュニティプラザ・パンフレット
 - ・金沢大学：見学時配布資料、金沢大学国際機構支援室／学生部学生支援課、2015.2.

- ・国際教養大学：
<http://web.aiu.ac.jp/campuslife/dormitory/>
 - ・国際基督教大学：2015年度教養学部学生寮案内、国際基督教大学ハウジングオフィス、2015.1
 - ・芝浦工業大学：国際学生寮・パンフレット
 - ・立命館アジア太平洋大学：JAFSA-KAIE Seminar 2014 in Tokyo 資料集、JAFSA、2014.12.1
- 6) インタビュー調査において、学生達が「階」ではなく「フロア」と呼んでいたため、ここでは「フロア」で統一する。

<参考文献>

- 1) 鈴木在乃：「日本の大学における留学生宿舎提供の現状と課題、学術講演梗概集、F-1 都市計画、建築経済・住宅問題、pp1521-1522、2010
- 2) 仲摩純吾、坂井 猛、鶴崎 直樹、趙 世晨：外国人学生居住施設の整備実態とその国際交流拠点としての可能性に関する研究—国際化拠点整備事業（G30）採択大学を対象として、学術講演梗概集、都市計画、pp193-196、2014
- 3) 中村展洋、伊藤昭、今村正治、小野敏子（2006）：立命館アジア太平洋大学における国際学生寮の教育的効果とレジデントアシスタント養成プログラムの開発について、大学共生研究、1、pp139-151、2006
- 4) 吉田千春：混住寮の生活では何が学ばれているのか—レジデント・アシスタントの語りを中心に—、国際日本学論集、明治大学大学院、第4号、pp. 1-16、2016
- 5) 山川史、大学寮における短期留学生の学び、異文化間教育学、45、pp93-107、2017年3月
- 6) 出口朋美、八島智子：実践共同体としての大学寮における留学生と日本人学生の対人関係、多文化関係学、Vol.5、pp33-47、2008
- 7) 山川史：寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究、異文化間教育、第38号、pp100-115、2013
- 8) 吉田千春、田中友章、飯田捷：混住型学生宿舎の計画と運営に関する研究—スーパーグローバル大学創成支援採択大学の先導的事例を対象として—、住宅系研究報告会論文集 11、日本建築学会、pp13-20、2016.12
- 9) 美馬のゆり、山内祐平：未来の学びをデザインする、東京大学出版会、2005.4
- 10) 岩崎千晶編著：大学生の学びを育む学習環境デザイン、関西大学出版部、pp55-86、2014.3
- 11) 加藤善子：ラーニング・コミュニティ・教育改善・ファカルティ・ディベロップメント、大学教育研究、神戸大学教育推進機構、第16号、pp1-16、2007
- 12) Allan Blattner, Tony Cawthon, James A. Baumann：MILESTONES IN CAMPUS HOUSING, Campus Housing Management Past Present and Future, Association of College & University Housing Officers, Vol.1, 2013
- 13) 太田浩・塚田亜弥子：韓国の国際交流政策、大学の国際化と日本人学生の国際志向性、横田雅弘・小林明編著、学文社、pp121-149、2013
- 14) 耳塚寛明：お茶の水女子大学2つのコモンズ—「共にあること」を理念とした教育施設—(下)、文部科学教育通信、pp10-11、2011.10
- 15) 横田雅弘・白土悟：留学生アドバイザーング、ナカニシヤ出版、pp360、2004
- 16) 川島大輔：ライフレビュー、質的心理学の方法—語りをきく、新曜社、pp144-158、2007.9